

生活館の外観をリニューアル、 鮮やかな嶺朋カラー・藤色に！



嶺朋会報

平成28年2月29日発行

発行責任者
嶺朋会長
松本 玲子

印刷 富士ニュース社

嶺朋へ 若い力を...



嶺朋会長
松本 玲子

母校から臨む富士山の頂上に、真綿の帽子をかぶったような雪が積もる頃となりました。一年に一度、嶺朋をお届けする時期になりました。皆様には、お元気で過ごすごしのことと存じます。日頃より同窓会へ大きなお力をお寄せいただき、誠にありがとうございます。

平成二十七年度総会、高樓祭での「第四回同窓会のお部屋」の開催も、多くの皆様のお力添えで、無事終了致しましたことをご報告申し上げます。また、念願の生活館の外壁の塗り直しが完了し、あの藤色が戻ってまいりました。機会がございましたら、懐かしの母校を訪ねてみてはいかがでしょうかでしょうか。思い出が蘇ることでしょう。今後、生活館内部のリニューアルも引き続きお願いしてまいります。

昨年と同窓会総会当日に、「富士ニュースの総会案内を見て参加しま

した。」というお二人の若い男性の卒業生が参加して下さいました。大学卒業後、地元の企業に就職したばかりのフレッシュユマン。「来年の同窓会には、若い人達に参加を呼びかけ、大勢で来ます。」と、嬉しい約束をして下さいました。

日頃より、「嶺朋へ若い力を導入していくこと」の重要性を、ひしひしと感じておりましたので、大変心強く思いました。今後、どの年代の方でも参加しやすい同窓会嶺朋を目指して、事業を展開していくことを目標にし、役員一同力を合わせて進みたいと思っております。皆様、どうぞ、アイデアをお寄せください。

さて、現代社会は、大きな発見や発明が目白押し。すばらしい未来が待っているような錯覚を起しますが、一方では、地域の絆の喪失、少子高齢化、人口減、そして、貧困、いじめ、虐待などの問題も山積みです。こんな時こそ、伸びていく若者と経験豊かな先輩とで、力を出し合い、よりよい嶺朋を、築いてまいります。

末筆になりましたが、皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。今後とも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

平成27年度
「嶺朋」
 総会に寄せた
 昭和39年卒 漆畑 典子

平成二十七年五月二十四日、吉原高校嶺朋総会が、ホテルグランド富士で開催されました。私達七十歳の当番学年実行委員二十六名は、八時十五分に集合し、二百名以上の同窓生を迎えるべく、わくわくしながらも気を引き締めて準備にとりかかりました。九時半頃になるとたくさん



の同窓生が集まり始めました。十時、司会の湯川さんの緊張の中にもりんとした声で、進行の運びとなりました。齊藤校長先生、松本会長、神田副会長のお話から、母校が

現在九十五%の進学率を誇り、かつ地域に根差した学校として歩んでいる姿が実感させられ嬉しく思いました。サプライズとして昆寿を祝して三十二年卒の十一名の方に花束を贈呈し喜んでいただきました。第一、第二校歌の斉唱に心が一つとなり総会が終了しました。

二部は古希フラガールによる軽快な「月の夜は」と優雅な「南国の夜」を踊りました。最初は人前で踊るためらいがありました。二度と華やかなドレスを着て髪かざりをつけて踊ることはないだろう」と一致団結して、何度も練習を重ねました。選曲も良く、きれいにまとまって踊れ一安心しました。

佐野玉枝さんによるメリハリのある手品に度肝を抜かれ、十分楽しんでいただけだと思います。全員で歌った「四季の歌」「みかんの花さく丘」「富士の山」は手話も入れて工夫をこらし、アトラクションは無事終了しました。

懇親会は各学年の絆を深めたことはもちろん、他の学年とのつながり

も生まれ、心強く感じました。平成二十二年卒の若い男子の参加もありました。次期当番学年にオレンジカラーのバトンを渡し、来年の再会を約束して閉会となりました。

この様に綿々と受け継がれてゆく、吉原高校「嶺朋総会」は卒業した私達の誇りであり宝です。御参加くださったたくさんの方々の同窓生、来賓の方々、次回も又元気なお姿をみせて下さる

支部だより



須津支部
 昭和36年卒
 高城睦子

私達の須津支部は、富士市内の東に位置し須津川溪谷、大棚の滝、浮島沼また通学に利用した岳南鉄道の須津駅、神谷駅、終点江尾駅があります。私は富士市内に戻って二十年になります。支部活動は以前から先輩方の努力でずっと続いており、現在の会員数は二百八十名余りです。役員は支部長、副支部長、会計、会計監査、顧問、各町内に役員一名の構成です。嶺

事を念じて母校の発展をお祈り致します。

参加していただいた皆さまの御協力のおかげで、当番学年として無事終了できましたことを心より感謝致します。

伝統の大切さ、絆の深さに改めて感じ入り、吉原高校卒業生の誇りを持ち、今後の吉原高校の発展・活動を心より期待致します。

朋会報の配布、新入会員の勧誘、年会費三百円で運営し(九十才以上の方は名誉会員となり年会費は免除されます)会員が死亡した場合は弔電と香料を送ります。本部総会の後、支部の総会を開いて町内の集会場等で行っていましたが、近年はバス旅行を実施しており今までに浜名湖花博、愛知万博、鎌倉散策や武相荘と深大寺等、昨年は徳川家康没後四百年ということに久能山東照宮と登呂遺跡に行きました。年齢層が広いので皆様に多数参加して頂くのはなかなか難しく毎行先選定に努力しています。これからも長く引き継がれて須津支部が続いていくことを願います。本部嶺朋の発展をお祈りします。

高 楼 祭

「同窓会の部屋」から



昭和49年卒
小泉 惠津子

吉高を卒業してから実に四十二年経たある日、「来年度の『同窓会の部屋』は、還暦になる学年に当番をお願いしたい。」という連絡を松本会長さんから受けました。突然のお話に不安と責任が交錯する中、早速仲間へ声をかけておきました。そして、一年後、高樓祭と同時開催で行なわれる「同窓会の部屋」の会場である生活館



丹精込めた作品が来られた方々を楽しませてくれました

に、仲間の輪が広がり、何十年も会っていない同期も集まってくれました。校舎等は、すっかり様変わりしたものの、生活館は昔のまま。懐かしさに浸りながら、学生時代に戻り、部屋の雑巾がけに汗を流しました。当日には、多くの出品作品に名札をつける人、飾りつける人との連携プレイで準備を進めてくれました。老朽化した生活館の一角は、アトリエのような展示室になりました。要領を得ない私を先輩方や仲間が支え協力してくれたことに感謝感謝でした。「同窓会の部屋」に関わらせていただいたことで、同窓生のつながりの大切さや同期生の結束を感じ、すがすがしい日となりました。

展示作品には、手芸、書道、陶器、ステンドグラス、アートフラワーなど趣味を超えた見事な芸術品で年齢幅もあり、最高齢は九十歳の先輩で、感動しました。同窓会の部屋に来場した在校生や家族、先生方も同窓生の作品に感嘆していました。また、展示と平行



して同窓生と語らえる場もあり、そこでは、安田さんが紙バンドでくまモンの作り方を教えて下さったことが、卒業生と在校生をつなぐ機会となりました。終始、場が和み、くまモンを作り上げた在校生の男子の笑顔が印象的でした。

「同窓会の部屋」は、大盛況で来場していただいた方のアンケートも好評でした。発足して四回目的「同窓会の部屋」の当番学年として貴重な体験をさせていただいたことに感謝するとともに、人とのつながりが希薄になる現代、同窓生のつながりを大切にしたいこの部屋が永遠に続くことを願います。



今泉支部
昭和34年卒
井出 充子

同期会だより

清しき日々

新築まもない校舎から私の高校生活は始まりました。

進学希望だったので、一年間で音楽部をやめ、二年生からは、勉強と向き合う生活となりました。

小さい頃から数学は苦手でしたが、

一年の時の「幾何」の授業を契機に百八十度変わりました。明確に答えの出ることが性に合ったのかもしれない。解けない問題にぶつかるとフアイトが湧き、一つの問題を、何時間も考えました。時には翌日まで持ち越して考えることが楽しくて仕方なかったのです。疑問が解けるといふ事は何と清しきものか。ますます数学に夢中になりました。

その頃、「灰色の受験生活」という言葉をよく耳目にしましたが、数学を通して学ぶ楽しさを知った私は、苦しくはなく、逆に計画を立てて一日一日をこなしていくことに達成感がありました。また、勉強だけでは何か味気ないと、一日の勉強後の三十分間、毎日トルストイの『戦争と平和』を読みました。一年半かかりましたが、豊かなすばらしい時間でした。

この時期に、読むと決めた本を読み通し、苦手な教科を克服したという自負、それは少々の自信となり、その後の人生の大きな支えとなりました。

依頼された「同期会だより」から内容は離れてしまいましたが、ひたむきだった日々をなつかしく思われている同窓生は多いのではないかと思います。身近な同期生に声掛けを心がけ、母校と同窓会の発展に微力を尽くしていきたいと思えます。

趣味を楽しむ



昭和 36 年卒
長津 勝恵

昨年九十六歳で他界した母はいつもポケットに小さな手帳と鉛筆を持っていました。旅行の時も家事をする時も気になった事はまめにメモをし、それを元に短歌を詠んでいました。母は若い頃から独学で短歌を作っていたようですが、四人の子供が巣立ってからサークルに入り、若い人達と共に学び、とても楽しそうでした。私も子供達が家を離れてからは心の空洞を埋めるかのようにカルチャー・スクールなどに通い、自分探しをし

てきました。その中の一つに十年ほど前から始めた俳句がありますが、やはり母の姿に影響されたのかと思っています。

近年「フォト五七五」などが流行っていますが、私も夫婦共通の趣味であるカメラを手に国内外を旅行し、撮った写真に俳句を付け、パソコンを駆使して作品に仕上げ楽しんでいきます。俳句だけでは見えない情景、又写真だけでは表現出来ない心の機微も写真に自筆の句を添えることにより、臨場感のある思い出として残すことが出来ると思っています。

子供達が巣立ってから二十年以上が過ぎ、趣味にも数多くチャレンジ



助手席に
母のまごころみ
菊日記

しましたが、自然に淘汰され、最後には無理なくそして楽しいと思える事が生涯の「マイ趣味」として残るのではないかと思います。

私は先日、第二回目の「フォト俳句展」を開催する事が出来ましたが、残念ながら母に見てもらうことは叶いませんでした。母は空の上から「少しは上達したねえ」と微笑んでくれたのでしょうか。

「花育」を通して

昭和 41 年卒

服部 みどり

子供を持つ親がわが子に足りない物として、思いやりや愛情そして命を大切にすることをあげています。生きていく植物に触れるいけばなは水を替えて大切に育てたら長い間美しい姿で咲いています。放っておけばすぐに枯れてしまうという命の重みを実感できます。いけばなを通し歴史や文化を味わい楽しむことはもちろん命の重みや思いやり、また自然を愛する心や環境保護への意識を高めることもできます。花による心の教育を「花育」と言います。身近な自然に触れる機会が少なくなっている今、古くから日本人が美しいと感じ



じていたもの、草木が自然の中で生きる姿を改めて見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。私は在校生に少しでも日本の文化に触れてほしいと思いい副校長先生にご尽力願いました。国際科の一年生三十八名全員が華道教室を体験いたしました。皆さん初めての経験で戸惑っていましたが前向きに真剣な態度で花を生けていました。生徒には制作意図を決めて作品に臨んでもらいましたが、出来上がった作品はそれぞれ生けた人の個性や性格、工夫があり素晴らしい作品になりました。日本の伝統文化であるいけばなを通して自然の美しさ、日本人の美意識を感じていただけたのではないのでしょうか。

季節を感じる花材を用いるいけばなに触れこの体験が心を育む一つになれば幸いです。

繋がる時と思い



昭和56年卒 渡邊 祐子

吉原高校を卒業して三十余年。保育士として働き、結婚、子育てを経て、十年ほど前から特別支援教育サポーター員として、小学校に勤務し、子どもたちの生き生きとした声の中、楽しく仕事をしています。

昨年、すてきな出会いがありました。四月に出されるPTA新聞の「高校時代に打ち込んだ事は？」の質問に、迷わず「箱根サンショウウオの産卵実験」と書いたところ、同じ学校の栄養士の方から、「もしかしたら、吉高生物部？」と、声をかけられたのです。なんとその方は、生物部の先輩でした。部活の話で盛り上がりながら、長い時を経て共有できる思いがあるのは、とてもすてきなことだと実感しました。

実は、我が家は、母、私、娘の親子三代吉原高校の卒業生です。改めて、同じ学校で学べた幸せをかみし

めもしました。息子も娘も、それぞれの夢をかなえて、自分の道を歩み始めました。その姿を、母とともに見守りながら、私自身、たくさんの子どもたちに囲まれ、元氣パワーをいっぱいもらいながら、また、すてきな出会いに繋がるよう、一日一日を大切に頑張っていると思う毎日です。

出会いにありがとう



昭和61年卒 伊藤 彰子

今考えてみると、私にとって吉原高校は、大切な人に出会うための場所だったように思います。気の合う友達とは、朝早く登校し、日常のあれこれをお喋りして楽しい毎日でした。卒業して三十年近く経ちますが、今でもずっと大切な友達です。元氣がない時は励ましてくれて、辛い時には寄り添ってくれます。嬉しい時には自分のことのように喜んでくれて、何でも相談できる頼りになる存在です。

学生時代、先生方にも大変お世話になりました。保育科の受験にピアノの試験があり困っていると、音楽

の岡田俊二先生が、教えてあげるから朝ピアノの練習室にきなさいと言ってくれださり、早い時間から指導してくださいました。とてもありがたかったです。先生のおかげで、希望の学校に入学し、幼い頃からの夢だった幼稚園の先生になることが出来ました。感謝の気持ちで一杯です。

吉原高校には沢山の思い出が詰まっています。生活館の前に生まれたばかりの子猫が置かれていたこと。昼休み、パンを買う列に急いで並んだこと。部活やクラブの楽しい時間。そして何より、私の人生から外せない親友に出会えたこと。これからも、そんなあなたがかい人の縁を大切にしたいです。

母校とのつながり



平成20年卒 藤畑 浩輝

早いもので吉原高校を卒業してから八年が経ちました。今改めて当時を思い返すと、楽しかった思い出がいっぱいあります。もちろん高校生活三年間の中で、勉強や部活などで悩み、辛いこともありましたが、今ではそれも楽しかった思い出の一つです。

当時の友人とは今でも連絡を取り、互いに悩みがある時は集まり、励ましあっています。長いようで短かった高校生活で私は、かけがえのない友人を得ることができたと思います。

私は現在、社会福祉協議会に勤務しています。社会福祉協議会では、誰もが安心して暮らすことができる地域社会の実現のため、ボランティア活動や相談援助活動など様々な事業を行っています。そんな、私の業務の一つに「赤い羽根共同募金」があります。この募金活動は募金に協力をいただく市内のボランティアの方々によって支えられており、吉原高校の生徒の皆さんにも学校や、福祉まつりの会場で募金に協力をいただいています。先日、学校募金に協力をいただくため吉原高校を訪問しましたが、対応してくださった先生が、当時大変お世話になった先生で、とても懐かしく、仕事よりも思い出話に花がさきました。

吉原高校を卒業して社会人となった現在、このような形で母校の吉原高校と関わりをもつて仕事ができることを大変うれしく思います。これからも、吉原高校の一卒業生として母校のことを見守っていきたく思います。

学校だより

「学び」のスタイル



学校長 齊藤 浩幸

愛知県安城市の小学校六年生が、磁石の力を利用してスチール缶とアルミ缶を自動的に分別するごみ箱を開発し、特許を取得しました。ごみ箱はプラスチック板を組み合わせた約九〇センチの直方体で、内部に仕切りがあり、スチール缶入れとアルミ缶入れに分かれています。投入口はアルミ缶入れの真上に設け、アルミ缶はそのまま真下に落ちますが、スチール缶は磁石の力で反対側のスチール缶入れに落ちる仕組みです。もともとは夏休みの自由研究から始まったということでした。夏休みの自由研究は子どもだけでなく親も頭を悩ます宿題ですが、自由な発想で、試行錯誤を繰り返し目標に向かう態度は重要で、義務教育で終わってしまいうことは惜しいことです。昨年度、地域の魅力を理解し、課

題に挑む力を育むため、従来のボランティア活動に加え、新富士駅での「英語通訳ボランティア」に挑みました。今年度は「富士山湧水の研究」、「吉高テニスコートの土壌改善の研究」など、身近なテーマで理数的思考を高める実験にクラスの仲間と取り組み、研究成果を愛知工業大学などで発表に挑んでいます。コンピュータの進歩により、ルーティン化した作業は、急激にパソコンやロボットに置き換わっていくでしょう。その一方で、現代社会の抱える課題は複雑で容易に解決できない、正解のないものばかりです。絡んだ糸をほぐし、解決の方向性を見出すには、時間はかかりますが、学び続けることが唯一の方法だと考えます。次代を担う高校生だからこそ、基礎（しっかりとした学力）を身に付け、実践を通じた課題設定力（校外活動や自由研究）、粘り強く取り組む態度（部活動）を育成する必要があります。これまで以上に学習と部活動を両立させ、教科の枠を超え、生徒と先生と一緒に学ぶ「協同の学び」のスタイルへの変換が求められる時であると感じています。

生徒会本部

後期生徒会長 工藤有咲

後期の生徒会活動は前期の活動に比べ、目立つ活動は少ない。後期生徒会の活動を挙げると、夏休み中に行われた中学生一日体験入学がある。この活動は来年度の入学人数に大きな影響を与えるため、重大な行事だ。当日は多少の失敗もあったが、受付や案内に協力した本校の生徒のおかげで、無事成功させることができた。在校生の話を聞いた中学生は、本校に良い印象をもったことだろう。

後期生徒会の任期は高樓祭の準備期間までだ。後期生徒会の活動が高樓祭の明暗を分けるといっても過言ではない。来年度の高樓祭は、五十年の歴史を守りつつ新しいことに挑戦していきたい。高樓祭を成功させるためには、



生徒の協力が不可欠となる。私達生徒会役員も努力を惜しまないので、生徒の皆さんには最後までついてきてほしいと思っています。

書道部

部長 佐野綾音

私たち書道部は、一年生一人、二年生九人の計十一人で活動しています。

書道部の主な活動は高文祭や国際高校生選抜書展といった、作品展に向けて作品づくりをすることです。様々な書体にふれ、部員と切磋琢磨しながら日々の部活を楽しんでいます。中には一度も習字を習ったことのない人もいますが、入部した時とは比べものにならないほど上達し入賞することも多くなりました。

文化祭では書道パフォーマンスをやらせていただいています。場所の確保や墨での汚れ対策などで開催すること自体大変な書道パフォーマンスですが、過去二回とも成功し、多くの方が見に来て下さいました。作品構成や人の動きを考えながら完成度の高い作品づくりをするのは大変ですが、普段と違う筆で、普段と違う紙に書く書道パフォーマンスはとても新鮮で楽しいです。ま



第61回静岡岡高等学校書道展

地区選抜の部 特別賞 2年 古郡愛理 「臨 争座位文稿」

だ始まったばかりですが、これから先も続き、伝統的な催しになっていければ良いなと思っています。

美術部

全国総合文化祭出場 高田穂波



私たち美術部は、毎年十一月に行われる東部展への作品出品を主な目標に、日々制作活動に励んでいます。私も昨年東部展に向けてボールペンを画材に用いた作品制作に取り組み、この作品で「美術・工芸教育研究会会長賞」を受賞させていただくことができました。

五十号という大きなサイズのキャンバスをボールペンでひたすら埋めていくような作業は本当に骨が折れましたが、その分作品が仕上がったときの達成感も大きく、この受賞は私にとって大変嬉しいものでした。

その後この作品は全国総合文化祭にも出品させていただくことになり、私は昨夏に滋賀の県立近代美術館へ行き

ました。会場に並んだ他校の生徒の作品は、どれも非常にレベルが高くてただ圧倒されるばかりでしたが、自分のこれまでの制作活動をふり返り、反省することができたという点ではとても良い経験をさせていただいたと思っています。

家庭部(染色班)

部長 望月音々

最後に、今回作品の制作に協力してくださった先生方や部員のみなさんに感謝すると同時に、今後の美術部の更なる活躍に期待したいと思います。



限られた時間の中で一から作るのには大変な面もありますが、型を作る作業を一つ一つ丁寧に

行くと自分の納得のいく作品が出来るので、愛着がわき、とても嬉しく感じま

す。

染色班は自分達の代で終わりになってしまう。そのため今までの先輩達の思いを引き継いだ作品を作りたいと考えました。そこで、先輩達が残してくれた型を織りませながら一つの大きい作品を完成させようと、現部員二名で協力して頑張っています。

新体操部

顧問 青柳敦子

多くの卒業生を輩出している吉原高校ですが、女子校時代から「代表する部活動といえば？」の問いに、必ず名前が挙がる「新体操部」。私、顧問も本校の卒業生であり、また、新体操に青春を捧げてきた一人です。

高校で新体操を始め、大学、教員となった今も、厳しさの中にも楽しい新体操を目指し、日々、新体操が大好きな生徒達と共に、掲げた目標に向けて精進しています。

高校時代は、諸先輩方の「伝統」を受け継いで全国大会へ出場し、指導者となつてからは、静岡団体優勝の経験を生かし、母校で全国大会出場を果た



してきました。若いうちにいろいろな経験をすることの大切さ、そして何より、その責任あるチャンスを与えてくれた環境がいかに人を大きく育てるかということ

を、身をもって学ばせて頂きました。今、部員は三年生が引退し、二年生は元々部員が入らず、一年生七名で活動しています。廃部の危機にあつたとき、(吉原高校で新体操を頑張りたいたい)という気持ちがある選手達だけに、私も本気でその気持ちに答える指導をしています。吉原高校の昔も今も知る者として、結果はもちろんです、それ以前に、今の時代に欠けている「人との繋がり」を大切に、新体操を通じて教えていきたいと思っています。

やり直しができない一度きりのチャンスに挑み、この新人戦で得られる全国大会の切符が手に入るよう、生徒と共に悔いのない演技を目指し、この会報が発行される頃には、良いご報告が出来るよう尽力致します。

仲間好文芸

短歌

ようやくに暑さandraぎ軽やかに百
日紅の咲く道をゆく
昭和二十年卒 稲葉 正子

白樺の林彩る紅葉の旅ゆくわれの
心慰しぬ
昭和二十七年卒 田村百合子

目立ち初めし芝の草ひく着膨れの
わが背に温し如月の陽は
昭和二十七年卒 渡邊里恵子

いとなく勉強会の席決まり月一
回の会ふ日待たるる
昭和二十八年卒 渡井 明子

椽の蜂蜜一さじ掬ふこの朝大内宿
は雪深からむ
昭和三十年卒 福西美枝子

煩惱を捨て捨て歩む戻り道喜寿に
向かひて日びのスクワット
昭和三十四年卒 芦澤 節子

うち続くススキ穂波のその涯に茄
子色の富士悠然と立つ
昭和三十五年卒 影島 明子

かさかさ枯葉踏む音優しくて林
の中のやさしさを追う
昭和三十六年卒 丸山 一江

日曜の娘の酒蔵は忙しく姑の喜ぶ
顔の浮びて
昭和三十七年卒 西川ひさ江

厳しくも慈愛あふるる亡き父の面
影偲ぶ吉原の街
昭和六十一年卒 牧野 育美

五行詩

昭和三十九年卒 庄司 幸子(二作)
絶句した
解説者

無言
という

饒舌

投網を

引き寄せるように
冬の雑草の

根の強さ
こうありたい

「バランスが悪い」と
昭和四十九年卒 守谷みち代(二作)

友の呟き

残った乳房

いのちの重さを
抱える

一番星

きつと、母だ
真っ先に

話しかけてくる
私をめぐって

支部長名簿

平成28年2月現在

支部名	氏名	卒年
吉原	太田 素雅	51
今泉	野村由貴子	42
伝法	渡邊實枝子	38
広見	小林 昭子	40
青葉	佐野 敏江	31
大淵	高橋 恵子	44
原田	市川喜和子	40
吉永	豊田 幸子	34
須津	高城 睦子	36
元吉原	米山てる美	38
今泉北	渡辺 昌則	27
吉永第2	望月留美子	43
富士見台	川島 けい	46
浮島	太田 若代	38
鷹岡	吉野 京子	38
岩松	影山 玉実	53
富士北	遠藤 昌子	41
富士南	鈴木 紀子	34
田子浦	安田 幸子	38
富士宮	遠藤 栄子	38
沼津	清水 敦子	31
静岡	宮下 能弘	28
関東	杉 吉郎	44
富士川	望月のり子	41
松野	原 郁美	50
蒲原	宇佐美節子	38

仲間好文芸
文芸作品募集

募集しています。
俳句、短歌、五行詩、川柳、詩など、
テーマは自由です。
ご応募、お問い合わせは、編集委員長・
神田まで。
FAX 0545-51-2118
携帯 090-3251-16795

平成28年度「嶺朋」総会

日時:平成28年5月15日(日)

会場:ホテルグランド富士

会費:5,000円 ※当日会場でお預かりします。

多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

・平成28年度総会の当番幹事は、S40年卒の皆さんです。

・出席ご希望の方は、4月20日(水)までに下記までご連絡ください。

嶺朋 TEL.080-5134-4480
事務局 FAX.0545-51-5258

または各学年理事まで。

編集後記

新春に相応しい真っ白な富士山、青空
にくっつきりと映える美しいその姿こそ郷
土の誇りです。

念願の生活館の外壁工事が完成しまし
た。藤色が鮮やかによみがえり、嬉しい
限りです。

今号は富士山の白と澄んだ冬空の青そ
して生活館の藤色と三色の絶妙なコント
ラストで表紙を飾りました。紙面へのご
感想、またアイデア等ぜひお寄せ下さ
い。お待ちしております。
(神田)



編集委員長 神田富美子
編集委員 小林君子・渡邊弘子
川島けい・三木政代
太田若代